



約100年前のパナマ運河
(1913年9月)

～55年目の初公開！～ 特集展示「大佛次郎の『パナマ事件』」



現在のパナマ運河
画像提供：パナマ共和国大使館(2点とも)

『パナマ事件』は1959年(昭和34)3月から「朝日ジャーナル」に掲載されました。それから、55年の時を経て、奇しくもパナマ運河開通100周年の今年、同誌編集者の故秋山節義^{あきやまだよし}氏の遺品から連載全27回分の生原稿および挿絵原稿等関連資料が発見され、大佛次郎記念館に寄贈されました。大佛次郎記念館では、この貴重な資料をいち早く紹介するため、特集展示を開催します。

(1) 展示概要

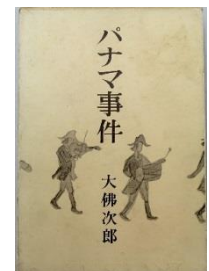
戦時中の言論統制と議会政治の危機のなかで、一度は執筆を断念した『パナマ事件』。フランス第三共和政という一見、遠く離れた西洋の歴史を描きながら、大佛の意識の中にあったのは常に日本の社会の在りようでした。構想から20年、満を持して『パナマ事件』を発表した作家の思いをたどります。

(2) 展示内容(前期後期で展示替えを行います)

- 大佛次郎の直筆原稿
- かざまかん 風間完氏による挿絵原画(前後期10点ずつ)
- 編集者秋山節義あて大佛の書簡(風間完氏を推薦する文面など)
- パナマ事件の初版本
- 「朝日ジャーナル」(1959年創刊号～9/13号)



55年ぶりに発見された
大佛次郎の直筆原稿



『パナマ事件』初版本

(3) 会期

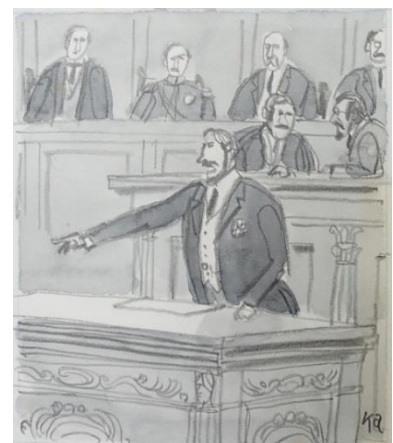
- 平成26年8月26日(火)～12月25日(水)
- ※休館日：原則月曜(祝日の場合は翌火曜日)
- 9/15、10/13、11/3の月曜祝日は開館
- 11/17-11/19は、テーマ展示の展示替えのため休館

(4) 開館時間

- 8～9月 10:00～17:30(入館は17:00まで)
- 10～12月 10:00～17:00(入館は16:30まで)

(5) 料金(入館料)

- こちらの料金で、テーマ展示「大佛次郎の子どもの文学」と収蔵品展も一緒にご覧いただけます。
- 大人(高校生以上)200円(150円)、小・中学生100円(80円)
- ()内は20人以上の団体料金
- ※毎月23日「市民の読書の日」と、第2第4土曜日、は高校生以下無料
- ※横浜市内在住の65歳以上の方は無料
- ※障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名は無料



風間完 挿絵原画
フランス下院議会の様子
(連載27回中の第21回目の挿絵)

※この機会に広く情報を掲載いただきたく、お願い申し上げます。

裏面あり

お問い合わせ先

大佛次郎記念館 【横浜市芸術文化振興財団】

館長：沼尾 実

特集展示担当：安川篤子

TEL：045-622-5002

* 『パナマ事件』とは

「偉大なるフランス人」レセップスを破滅にいたらしめたものは？ おごりか？それとも…？

太平洋と大西洋を結ぶ要衝の地パナマ運河。大佛次郎の『パナマ事件』には、この建設にあたったフランス人レセップスの苦闘と挫折、そして運河建設をめぐるフランス議会の腐敗が描かれています。

1888年、資金不足により頓挫したパナマ運河会社再建のため、富くじ付き社債の認可をめぐる議員買収が行われます。4年後この事実が発覚し、第三共和政を揺るがす疑獄事件へと発展しました。

スエズ運河を完成させ、世界中から「偉大なるフランス人」と呼ばれた男、レセップスに破滅をもたらしたものは？フランス議会の舞台に繰り上げられる「政治」とは？

* 大佛次郎が、戦時中に「筆を折った」そのわけは？

大佛は、フランス4部作の第3作として『パナマ事件』を構想していました。

しかし、戦時中の言論統制と議会政治の危機のなかで執筆断念を余儀なくされました。後年、その当時の心境を次のように語っています。

（前略）「パナマ事件」は「ドレフュス」、「ブーランジェ」に続けて書く予定であったが、折角存在する日本の議会が弾圧を受けて大政翼賛会化^{たいせいよくさんかい}に向かう時期だったので（中略）現状に不都合で独裁勢力の尻馬に乗るように覚えて、筆を折った。」

（『大佛次郎ノンフィクション全集第2巻』、1972年、朝日新聞社、「あとがき」より）

フランス第三共和政という一見、遠い西洋の歴史を描きながら、大佛の意識の中にあっただのは常に日本の社会のありようでした。

構想から20年以上を経て、満を持して『パナマ事件』を描いた作家の思いをたどります。

フランス4部作とは？

フランス第三共和政(1870-1940)の歴史を題材とする大佛次郎のノンフィクション4部作。（執筆年代順）

第1作 「ドレフュス事件」1930年<昭和5>

フランス陸軍ユダヤ系将校のスパイ冤罪事件であるドレフュス事件(1894-1906年)

第2作 「ブーランジェ将軍の悲劇」1935年<昭和10>

クーデタ未遂で共和政の危機へと発展したブーランジェ事件(1887-89年)

第3作 『パナマ事件』1959年<昭和34>

パナマ運河会社をめぐる贈収賄事件であるパナマ事件(1892-93年)

第4作 「パリ燃ゆ」1961-64<昭和36-39>

パリに成立した労働者政権であるパリ・コミューン(1871年3月-5月)

当初「朝日ジャーナル」に連載され、その後、最終章の「焦土」は雑誌「世界」に連載された

戦時筆を折り、2作目から
20年の時を経て執筆

いずれもフランス第三共和政を揺るがす“大事件”であり、大佛は歴史を遡る形で執筆したが、第1作目の「ドレフュス事件」執筆当時、既に『パリ・コミューン』に辿りつくにはあと二十年か、それとも三十年かかるだろうかと、友人の小牧近江^{こまきおうえ}（仏文学者・翻訳家・社会学者）に語っており、当初からフランスの歴史を描いた連作を構想していたことがうかがえる。